

【 復活讃詞 第4調 】

しゆのおんなでしはふくかつのひかるおと  
 主女弟子は復活の光お音  
 づれをてんしよりききうけて、  
 天使聞き受  
 げんそよりのていざいをふるいすて、しと  
 原祖定罪を振棄使徒  
 にほこりていえり、しはほろぼさ  
 誇日死滅  
 れ、ハリストスカみはふくかつして、せかいに  
 神復活世界  
 おおいなるあわれみをたまえり。  
 大憐賜

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
 光榮父子聖神歸今  
 いつもよよに、アミン。  
 何時世世  
 しととひとしくどうざなるもの、ちゆう  
 使徒等同座者忠  
 じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
 實神智役者聖  
 なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい  
 神撰笛愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう  
 満 器 我 國 光

しよおしや、あしとしゆきょうせいニコライ  
 照 者 亜使徒主教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
 爾 羊 群 爲 及

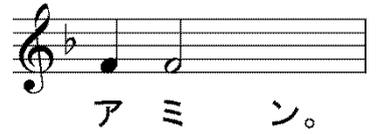
ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
 全世界 爲 生 命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。  
 三者 祈 給

司祭) ( 黙誦： 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と  
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔  
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを  
 殺 聖 常 生 者 我 等 を  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 提綱 (プロキメン) 主日第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の工業は何ぞ多き、皆智慧を以て作り、

しゅよ、なんぢのしわざはなんぞおおき、  
 主 爾 工業 何 大  
 みなちえをもつてつくれり。  
 皆 智慧 以 作

誦經) 我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり、

しゅよ、なんぢのしわざはなんぞおおき、  
 主 爾 工業 何 大  
 みなちえをもつてつくれり。  
 皆 智慧 以 作

誦經) 主よ、爾の工業は何ぞ多き、



【 使徒經 (アポストロス) 103 端 ロマ書 10 章 1 節～10 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup> 聖使徒パヴェルが <sup>じん たつ</sup> ロマ人に <sup>しょ よみ</sup> 達する書の讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>わ</sup> 我が <sup>ため</sup> イズライリの <sup>ねが</sup> 爲に <sup>ところ</sup> 心に願う <sup>い</sup> 所と <sup>ところ</sup> 神に禱る <sup>そのすくい</sup> 所とは、<sup>う</sup> 其 <sup>あ</sup> 救を得るに在

り。 <sup>けだしわれかれら</sup> 蓋 <sup>ため</sup> 我 <sup>しょう</sup> 彼等 <sup>な</sup> の <sup>かれら</sup> 爲に <sup>かみ</sup> 證 <sup>お</sup> を <sup>ねつしん</sup> 作す、<sup>しか</sup> 彼等は <sup>ちしき</sup> 神に <sup>したが</sup> 於ける <sup>う</sup> 熱心あり、<sup>う</sup> 然れども <sup>う</sup> 知識に <sup>う</sup> 循う

に <sup>あら</sup> 非ず。 <sup>けだしかれら</sup> 蓋 <sup>かみ</sup> 彼等は <sup>ぎ</sup> 神の <sup>し</sup> 義を <sup>おのれ</sup> 識らず、<sup>ぎ</sup> 己の <sup>た</sup> 義を立てんことを <sup>はか</sup> 圖りて、<sup>かみ</sup> 神の <sup>ふく</sup> 義に <sup>ふく</sup> 服せざり

き。 <sup>けだしりつぼう</sup> 蓋 <sup>おわり</sup> 律法の <sup>およそ</sup> 終は <sup>しん</sup> ハリストス <sup>ものぎ</sup> なり、<sup>いた</sup> 凡の <sup>りつ</sup> 信ずる者 <sup>りつ</sup> 義とせらるるを <sup>りつ</sup> 致す。 <sup>りつ</sup> モイセイは <sup>りつ</sup> 律

法 <sup>ぼう</sup> による <sup>よ</sup> 義を <sup>ぎ</sup> 指して <sup>さ</sup> 録せり、<sup>しる</sup> 之を <sup>これ</sup> 行 <sup>おこな</sup> いし <sup>ひと</sup> 人は <sup>これ</sup> 之に <sup>よ</sup> 由りて <sup>い</sup> 生きんと。 <sup>しか</sup> 然れども <sup>しん</sup> 信 <sup>よ</sup> による <sup>ぎ</sup> 義は

<sup>か</sup> 斯く <sup>いわ</sup> 云く、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>こころ</sup> の <sup>い</sup> 心に <sup>なか</sup> 言う <sup>たれ</sup> 勿れ、<sup>てん</sup> 孰か <sup>のぼ</sup> 天に <sup>すなわち</sup> 升らん、<sup>くだ</sup> 即 <sup>ため</sup> ハリストスを <sup>あるい</sup> 降さん <sup>あるい</sup> 爲なり、<sup>あるい</sup> 或

は <sup>たれ</sup> 孰か <sup>ふち</sup> 淵に <sup>くだ</sup> 下らん、<sup>すなわち</sup> 即 <sup>し</sup> ハリストスを <sup>のぼ</sup> 死より <sup>ため</sup> 上せん <sup>しか</sup> 爲なり。 <sup>しよ</sup> 然るに <sup>なに</sup> 書は <sup>い</sup> 何を <sup>ことば</sup> か <sup>ことば</sup> 言う、<sup>ことば</sup> 言

は <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>ちか</sup> に <sup>なんぢ</sup> 近し、<sup>くち</sup> 爾 <sup>あ</sup> の <sup>なんぢ</sup> 口に <sup>こころ</sup> に <sup>あ</sup> 在り、<sup>あ</sup> 爾 <sup>こ</sup> の <sup>すなわち</sup> 心に <sup>しん</sup> 在りと、<sup>ことば</sup> 是れ <sup>われら</sup> 即 <sup>つた</sup> 信の <sup>つた</sup> 言、<sup>つた</sup> 我等が <sup>つた</sup> 傳うる

<sup>ところ</sup> 所の <sup>もの</sup> 者なり。 <sup>けだし</sup> 蓋 <sup>なんぢ</sup> 若し <sup>くち</sup> 爾 <sup>しゅ</sup> の <sup>う</sup> 口に <sup>なんぢ</sup> 主 <sup>こころ</sup> イイス <sup>かみ</sup> スを <sup>かれ</sup> 承 <sup>し</sup> け <sup>ふく</sup> 認め、<sup>ふく</sup> 爾 <sup>ふく</sup> の <sup>ふく</sup> 心に <sup>ふく</sup> 神が <sup>ふく</sup> 彼 <sup>ふく</sup> を <sup>ふく</sup> 死 <sup>ふく</sup> より <sup>ふく</sup> 復

<sup>かつ</sup> 活 <sup>しん</sup> せし <sup>すなわち</sup> め <sup>すく</sup> し <sup>すく</sup> ことを <sup>すく</sup> 信 <sup>すく</sup> ぜば、<sup>すく</sup> 則 <sup>いた</sup> 救 <sup>いた</sup> われん。 <sup>いた</sup> 蓋 <sup>いた</sup> 人 <sup>いた</sup> 心 <sup>いた</sup> を <sup>いた</sup> 以 <sup>いた</sup> て <sup>いた</sup> 信 <sup>いた</sup> じて <sup>いた</sup> 義 <sup>いた</sup> と <sup>いた</sup> せ <sup>いた</sup> ら <sup>いた</sup> る <sup>いた</sup> る <sup>いた</sup> を <sup>いた</sup> 致 <sup>いた</sup> し、

<sup>くち</sup> 口 <sup>くち</sup> を <sup>くち</sup> 以 <sup>くち</sup> て <sup>くち</sup> 承 <sup>くち</sup> け <sup>くち</sup> 認 <sup>くち</sup> め <sup>くち</sup> て <sup>くち</sup> 救 <sup>くち</sup> わ <sup>くち</sup> る <sup>くち</sup> る <sup>くち</sup> を <sup>くち</sup> 致 <sup>くち</sup> す。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。わたしの心の願い、彼らのために神にささげる祈は、彼らが救われることである。わたしは、彼らが神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない。なぜなら、彼らは神の義を知らないで、自分の義を立てようと努め、神の義に従わなかったからである。キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。モーセは、律法による義を行う人は、その義によって生きる、と書いている。しかし、信仰による義は、こう言っている、「あなたは心のうちで、だれが天に上るであろうかと言うな」。それは、キリストを引き降ろすことである。また、「だれが底知れぬ所に下るであろうかと言うな」。それは、キリストを死人の中から引き上げることである。では、なんとやっているか。「言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある」。この言葉とは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉である。すなわち、

自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われるからである。

\*\*\*\*\*

司祭) <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>へいあん</sup> に平安、

誦經) <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>しん</sup> の神にも、ア ril l i ya、

【 ア ril l i ya 主日第4調 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

A ril l i ya、 A ril l i ya、  
A ril l i ya。

誦經) <sup>かみ</sup> 神よ、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>ほうざ</sup> の寶座は <sup>よよ</sup> 世に <sup>あ</sup> 在り、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>くに</sup> の國の <sup>けんべい</sup> 權柄は <sup>せいちよく</sup> 正 直 <sup>けんべい</sup> の權柄なり、

A ril l i ya、 A ril l i ya、  
A ril l i ya。

誦經) <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>ぎ</sup> は <sup>あい</sup> 義を <sup>ふほう</sup> 愛し、<sup>にく</sup> 不 法 <sup>にく</sup> を 惡めり、

A ril l i ya、 A ril l i ya、  
A ril l i ya。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと</sup> 人 <sup>あい</sup> を <sup>しゅさい</sup> 愛する <sup>わ</sup> 主 <sup>こころ</sup> 宰よ、<sup>かみ</sup> 我 <sup>し</sup> が <sup>ちえ</sup> 心 <sup>いさぎよ</sup> に <sup>ひかり</sup> 神 <sup>かがや</sup> を <sup>わ</sup> 知 <sup>しねん</sup> る <sup>わ</sup> 智 <sup>しねん</sup> 慧 <sup>しねん</sup> の <sup>しねん</sup> 淨 <sup>しねん</sup> き <sup>しねん</sup> 光 <sup>しねん</sup> を <sup>しねん</sup> 輝 <sup>しねん</sup> か <sup>し</sup> し、<sup>しねん</sup> 我 <sup>しねん</sup> が <sup>しねん</sup> 思 <sup>しねん</sup> 念 <sup>しねん</sup> )

<sup>め</sup> の <sup>ひら</sup> 目 <sup>なんぢ</sup> を <sup>ふくいん</sup> 啓 <sup>おしえ</sup> きて、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>さと</sup> が <sup>たま</sup> 福 <sup>わ</sup> 音 <sup>うち</sup> の <sup>なんぢ</sup> 教 <sup>ふく</sup> を <sup>いましめ</sup> 悟 <sup>いましめ</sup> ら <sup>いましめ</sup> し <sup>いましめ</sup> め <sup>いましめ</sup> 給 <sup>いましめ</sup> え、<sup>いましめ</sup> 我 <sup>いましめ</sup> が <sup>いましめ</sup> 衷 <sup>いましめ</sup> に <sup>いましめ</sup> 爾 <sup>いましめ</sup> の <sup>いましめ</sup> 福 <sup>いましめ</sup> た <sup>いましめ</sup> る <sup>いましめ</sup> 誠 <sup>いましめ</sup> を

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ  
畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ  
を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん  
爾は我が 靈 と體 との光 照なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至善にし

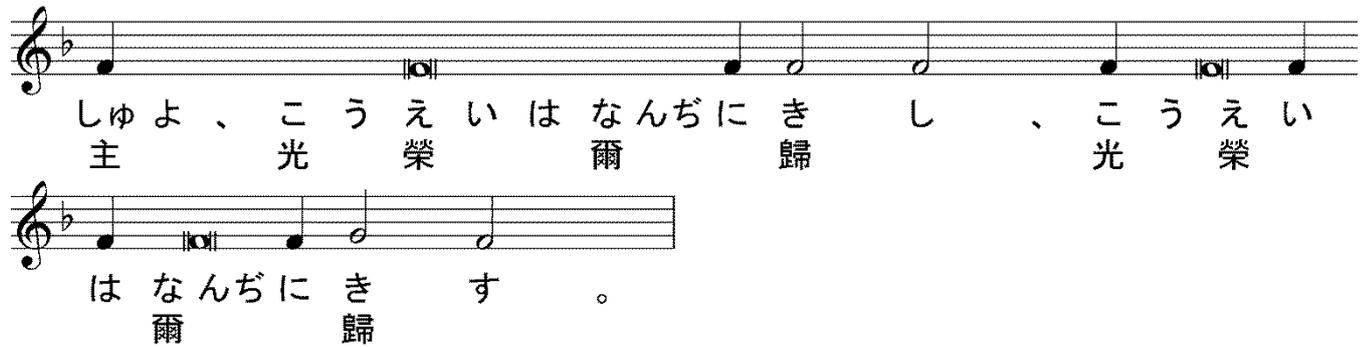
いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ  
て生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も 世世に、アミン。 )

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 28 端 8 章 28~9 章 1 節 】

えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん  
司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



でん せいふくいんけい よみ  
司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



つつし き  
司祭) 謹みて聴くべし、

か とき ち いた と き まき よ もの に にん は か い か れ  
司祭) 彼の時 イスス、ゲルゲシンの地に至りし時、魔鬼に憑らるる者二人 墓より出でて、彼を

むか はなはだ け ひと あえ そのみち す いた み か れら さ け い か み  
迎う、甚 猛し、人の敢て其路を過ぐるなきに至れり。視よ、彼等號びて曰えり、神の

こ われら なんぢ なん あづか と き い ま いた さ き なんぢ わ れら く る し た め  
子 イススよ、我等と 爾と何ぞ與らん、時未だ至らざる先に、爾我等を苦めん爲

ここ きた ここ はるか ぶた おおい むれ か まき か れ もと い も  
に此に來りしか。此より遙に豕の大なる群は牧われたり。魔鬼彼に求めて曰えり、若

われら お いた ぶた むれ い ゆる か れ これ い ゆ まき い ぶた むれ  
し我等を逐い出さば、豕の群に入るを容せ。彼は之に謂えり、往け、魔鬼出でて豕の群に

い み ぶた むれ ことごと が け う み か み づ お ぼ か もの は し ま ち い  
入りしに、視よ、豕の群 悉く山坡より海に逸けて、水に溺れたり。牧う者 奔りて邑に入

これら こと まき よ もの こと つ み まち こそ い むか  
り、此等の事と魔鬼に憑らるる者の事とを告げたるに、視よ、邑 擧りて出でて、イススを迎

か れ み そのさかい はな こ か れふね のぼ わた おのれ まち きた  
え、彼を見て、其境を離れんことを請えり。彼舟に登り、濟りて己の邑に來れり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスはガダラ人の地に着かれると、悪霊につかれたふたりの者が、墓場から出てきてイエスに出会った。彼らは手に負えない乱暴者で、だれもその辺の道を通ることができないほどであった。すると突然、彼らは叫んで言った、「神の子よ、あなたはわたしどもとなんの係わりがあるのです。まだその時ではないのに、ここにきて、わたしどもを苦しめるのですか」。さて、そこからはるか離れた所に、おびたしい豚の群れが飼ってあった。悪霊どもはイエスに願って言った、「もしわたしどもを追い出されるのなら、あの豚の群れの中につかわして下さい」。そこで、イエスが「行け」と言われると、彼らは出て行って、豚の中へはいり込んだ。すると、その群れ全体が、がけから海へなだれを打って駆け下り、水の中で死んでしまった。飼う者たちは逃げて町に行き、悪霊につかれた者たちのことなど、いっさいを知らせた。すると、町中の者がイエスに会いに出てきた。そして、イエスに会うと、この地方から去ってくださるようにと頼んだ。さて、イエスは舟に乗って海を渡り、自分の町に帰られた。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
 爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン) へ